
罪人に愛と死を

文野 玲介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪人に愛と死を

【Nコード】

N8313J

【作者名】

文野 玲介

【あらすじ】

数々の犯罪を行ってきた男が、ある時死神に目を付けられ、今までの行いの罰として命を狙われるハメになるのだが……。

「これで通算十二回か……」

クライムは目の前にある拘留所を眺め、溜息を吐く。それと同時に拘留所にブチ込まれた回数を覚えていて自分に嘲笑した。

今回は夜遊びをしている大学生達にカツアゲをしているところをパトロールしていた警官に見つかってしまい御用となった。軽い罪だったので嚴重注意と二日間の拘留で済んだ。

「じゃあそろそろ行く……ん？」

振り返って歩き出そうとすると、ジーンズのポケットに入れておいた携帯電話が震えだした。

「はい、もしもし」

『わしだ』

電話にでてみると、相手は若干声の枯れた老人の男性だった。

「なんだジジイか」

『フィクサーと呼べと前から言っておるじゃろう』

フィクサーと呼ばれているであろう老人は、憤った様子もなく淡々と話している。

『拘留所から出て早速なんじゃが』

「あー悪い、仕事の話ならあと二、三日後にしてくれ。久しぶりのシヤバだからゆっくりしたいんだよ」

『……わかった。では二日後にまた連絡する』

「ああ、悪いなジジイ」

『フィクサーじゃ』

クライムは電話を切って大きく体を伸ばした。長いこと留置されていたせいか、ボキボキと体中の骨が鳴いた。

クライムは職業柄、一定した仕事がないため、フィクサーに仕事を提供してもらっている。

(じゃあ家に帰る前に本屋に行くか)

クライムはこれから二日間の暇潰しを思いつき、本屋に向かうため市街の表通りを歩く。

クライムにこれと言って趣味はなく、大抵家、もしくは散歩がてら公園に行つて読書をする事だけだ。

そして横断歩道が青になり、渡ろうとした時だった。

右側から中型ほどの自動車が迫つて来ていた。車は明らかに停止するとは思えないほどの速度だった。

(なっ……!)

クライムは咄嗟に腕を交差させ防御の姿勢を取った。

それから次に認識したのは、自分は地面に寝そべつて頭から血を流しているということだった。その事実から自分は車と衝突したのだと理解した。

『キヤーツ!』

『おい君、大丈夫か?!』

意識が朦朧《もうろう》とする中、周囲の人々の悲鳴や駆け寄ってくる人達の声を聞きながら、クライムの意識はそこで途切れた。

No.01 (後書き)

初めて投稿する作品です。精進していきたくしたので良いところだけでなく悪いところもお願いします。

クライムが目を覚ますと、まず消毒液の匂いが鼻につき、白い天井が見えた。

首を動かしてみると、右腕に点滴が取り付けられていた。どうやらここは病院のようだ。

「あ、目を覚ましましたか」

ガラガラと引き戸を開けて入ってきたのは、純白の衣服を身に纏った看護師だった。

「よかったですねえ。交通事故にも関わらず被害は頭の怪我だけだそうですね」

「え……？」

そう言われ、自由に動く左腕で胸辺りをまさぐってみたが、確かに手術の跡や包帯はないし痛みもなかった。しかし、やはり頭には包帯が巻かれており、触ると少し痛みがあった。

「あなたを担当した先生も驚いていましたよ。『車に轢かれたのにこんな軽傷で済むなんて』って」

「そう……なんですか」

返事とは裏腹にクライムの顔は納得していないようだった。

確かに自分は防御したが、そんなもの焼け石に水程度だ。大体腕が骨折していないのもおかしい。

難しい顔をしているクライムを見て、看護師はクスリと微笑する。「まあまあ、体は無事だったから良かったじゃないですか。先生の話では数日後には退院できるそうですね。それまで安静にしてくださいね」

「あ、はい。わかりました」

自分の世界に入っていたクライムは慌てて返事をする、看護師は「では失礼しますね」と言い残し退室して行った。

クライムが寝ている病室は一人用の部屋なので他にベッドはなく、

病室に静かな静寂が訪れる。

「ま、少しは休めるか」

窓から入ってくる心地良い春のそよ風を肌で感じ、クライムは咳いた。

と、そこであることに気付く。

「やべっ、俺どれくらい寝てたんだ？ ジジイには二、三日って言ったからな」

辺りを見回していると、側にあった柵の上に携帯電話が置いてあった。

それを取って着信履歴を確認してみると、

「げっ……」

フィクサーから数件着信履歴が残っていた。

フィクサーは時間にうるさく、例え一分だろうと時間を守らないと、長い時間説教をされることになる。

しかし日付を見てみると、事故に遭った日から一日しか経っていなかった。

「なんだ、まだ一日しか経ってねえのか」

ほっとして、クライムはすぐにフィクサーに電話をかけようとしたが、

「やべ、病院では携帯は禁止なんだっけ」

すぐに電源を切って柵の上に放り出した。

白い天井を見つめ、しばらくぼーっとしていたが、

「バチが当たったかな……」

ふとそんなことを思い、窓から見える景色を眺める。

この窓からはクライムが生まれ育った貧民街が遠目に見えた。

この国は主に三つの街で構成されている。

比較的裕福な者が暮らし、会社のビルが点在するオフィス街、住宅が多く中ほどの所得者が住む市街、そして文字通り仕事がなく貧乏な者が住む貧民街。

クライムは十歳までその貧民街で暮らしていた。両親はろくに働

かず、いつも自分が鉄屑やボロ布を集めては小金を稼いでいた。この国では富裕層からの税金で高校までの学費はタダになるが、学校に通う暇もなかった。

そして十歳になるのと同様、その生活に嫌気が差して街を飛び出した。

それから生きるために必死だった。窃盗や強盗は日常茶飯事。時には飲食店の残飯をもらったりもした。

最初は働こうとも思ったが、当時は所詮十歳の子供。市街で雇ってくれるところなんてありはしない。

何度も犯罪を繰り返してれば、警察に捕まることもあった。警官のなかにはもう顔見知りまでいるほどに。

そして数年してフィクサーと出会い、それから裏の法に触れるような仕事をもらい生活している。

「まあこれだけ悪いことしてればバチも当たるか」

しかしクライムはこの生き方に後悔はなかった。むしろあのまま貧民街で暮らしていたら今みたいな生活はなかった。例え罪を犯さずキレイな身で残飯を漁るより、犯罪に手を染めて今の暮らしをするほうが断然マシだった。

「やっぱり昔を思い出すと気分悪くなるな……」

クライムは過去を振り返るのをやめ、目を閉じる。

退院したら今度は何の仕事しようか、今度は何の本を読もうか。

考えている内にクライムはいつの間にか眠りについていた。

No.02 (後書き)

2部です。是非読んでください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8313j/>

罪人に愛と死を

2010年10月28日06時53分発行